イクメンとは、子育てを楽しみ自分自身も成長する男性、または将来そういう人生を送ろうと考えている男性のことである。このような男性が少しずつ増えているという。私はこの傾向が今後ますます強まだろうし、そうあるべきだと考える。

イクメンがなぜ増えているのだろうか。３つの理由が挙げられる。

第一に、家庭や家族に関する男性の意識の変化がある。日本は１９８５年に女子撤廃条約を批准して以来、雇用面では男女雇用機会均等法（８５年)、男女共同参画社会基本法（９９年）を制定した。さらに１９９３年に中学校で、９４年からは家庭科が必修科目になり、料理などの家事や育児に関心を持つ男性が増えている。実際に私の周囲にも高校で食べるお弁当を手作りして楽しんでいる男子生徒がいる。

第二に、女性の側の意識変化だ。社会情勢の変化に伴い、専業主婦を選択せず、社会進出するようになった。パート･アルバイトの仕事だけでなく、企業の管理職や役員にも就いている。多くの女性が家で子育てをするよりも職場での責任を果たしたり、仕事を通して社会貢献することに生きがいを見出しているのだ。また、バブル経済崩壊後の景気低迷の中で、家計を支える必要性からやむを得ず仕事に就いた女性も多くいると推測する。このような女性の社会進出の裏返しとして、家庭内でそれまで女性が主に担っていた育児を男性が担当するケースが増えたのだと考える。

第三は、男性特有の事情があるのではないか。多くの男性がスマートフォンやタブレット型端末を操作するのなど IT を利用することに積極的であるように感じる。スマートフォンには家事に役立ったり、子育てを支援したりするアプリケーションが豊富にある。これを活用するれば、家事や育児の知識が少ない男性でも簡単に情報を得ることができる。家事や育児をしやすい環境があることもイクメンが増えている理由だろう。

最近、「イクメンプロジェクト」と題された男性の育児参加の社会機運を高めようというプロジェクトも発足した。確かに、育児をするよりも社会に出て働きたいという女性がいる一方で、外で仕事をするよりも家事や育児に魅力を感じる男性も増えている。しかし、実際には男性の育児休業取得率は「昇進や評価に影響する」などの理由でわずか２．６３％にすぎない。これは、まだイクメンへの社会全体の理解が進んでいない証拠だろう。基本的に男女の能力は等しい。得意不得意、好き嫌いは個人の能力の問題だ。よって、イクメンが増え、男女それぞれが得意分野にシフトしていくことが経済効率を高めたり、暮らしやすい社会につながると私は考える。